

子ども学会議について

第2回子ども学会議「多文化社会と子どもたち —— 未来をつくる共生と支援 ——」

大会推進委員長：牛島廣治（東京大学大学院医学系研究科）

在日外国人の数が増加し、それにともない国際結婚をする夫婦も増える中で、複数の文化や複数の言語のもとに生活する子どもたちの発達支援も子ども学の重要な課題になります。そのような子どもたちが、幸せに生きられる社会をどう構築するのか、共生によって私たちの社会がどのような豊かさを手に入れることができるか。未来へ向けての課題について考えました。

基調講演： 「多文化に生きる子どもたち」
佐藤郡衛（東京学芸大学国際教育センター）

特別講演： 「第二言語習得と子どもの脳」
酒井邦嘉（東京大学大学院総合文化研究科）
「言葉を失う脳」
岩田 誠（東京女子医科大学神経内科）

シンポジウムI「文化間移動と子どもの発達」

パネリスト： 山本雅代（関西学院大学・言語教育研究センター）/塘利枝子（同志社女子大学現代社会学部現代こども学科）/ヒダシ・ユディット（神戸外国語大学国際コミュニケーション学科）

司会： 佐藤郡衛（東京学芸大学国際教育センター）

シンポジウムII「在日外国人の子どもの現状と支援」

パネリスト： 箕浦康子（お茶の水女子大学開発途上国女子教育協力センター）/中村安秀（大阪大学大学院人間科学研究科）/丹羽雅雄（弁護士）

司会： 牛島廣治（東京大学大学院医学系研究科）

日時：2005年9月3日（土）、4日（日）

会場：東京大学本郷キャンパス

後援：厚生労働省

第3回子ども学会議「『子ども学』の未来を考えよう」

大会推進委員長：稲垣由子（甲南女子大学人間科学部総合こども学科）

子ども学を冠した大学はここ3～4年で急激に増え、いまや50大学あまりに認められており、今後も増加することが予想されます。しかし、大学によって「子ども学」の捉え方は微妙に違っており、教育内容もさまざまです。脳神経科学や遺伝学などの人間科学が急速に進歩する現代において、旧来の子ども理解に安住するわけにはいきません。学際的な学問のあり方を問うことで、子ども学の歩むべき方向を考えました。

基調講演： 「『子ども学』の歴史的背景と今後の展開を考える」
小林登（日本子ども学会代表）

特別講演I： 「子どもをめぐる『現在（いま）』」
本田和子（前お茶の水女子大学学長）

特別講演II： 「物や環境が行為に与えていること～『動く赤ちゃん事典』に見るヒトの発達」
佐々木正人（東京大学大学院情報学環・教育学研究科）

シンポジウムI「大学教育から『子ども学』の未来を考えよう」

パネリスト： 稲垣由子（甲南女子大学人間科学部総合こども学科）/吉岡眞知子（東大阪大学こども学部こども学科）/今村方子（梅光学院大学こども学部こども未来学科）/竹内伸宣（神戸海星女子学院大学心理こども学科）/浜田寿美男（奈良女子大学文学部人間行動科学科）

司会： 小野寺律夫（甲南女子大学人間科学部総合こども学科）

シンポジウムII「現場から『子ども学』の未来を考えよう」

パネリスト： 京極正典（小児科医）/友田尋子（看護婦）/西口純子（兵庫大学附属須磨幼稚園・加古川幼稚園園長）/赤澤真旗子（養護教諭）

司会： 白川蓉子（甲南女子大学人間科学部総合こども学科）

日時：2006年9月2日（土）、3日（日）

会場：甲南女子大学

第4回子ども学会議「子ども学と生命科学」

大会推進委員長：安藤寿康（慶應義塾大学文学部）

脳科学と遺伝学は、生命科学と子どもの問題を考える上での柱の学問となることが予想されます。子どもにかかわる教育学や心理学や社会学などの分野にも、これらの知見が影響を与え始めています。子どもの健やかな成長にかかわる社会的・教育的環境をどのようにつくればいいのか。

現代科学の成果を踏まえながら、根本的な問題を再考してみたいと考えています。

日時：2007年9月（予定）

会場：慶應義塾大学三田キャンパス

開催予定

● 関西「子ども学」大学関係者の集い

2006年4月8日に、甲南女子大学で「関西「子ども学」大学関係者の集い」が開催されました。

これは、関西の女子大を中心に子ども学を冠した学部や学科が増えていることを受けて、子ども学についての考え方を深め、ネットワークを広げていこうという趣旨のもとに行われたものです。

各大学とも子ども学を保育士や教員としての資格取得のためのカリキュラムの中にどのように位置づけたいのか、模索中であることが正直に語られました。その一方で子ども学をリベラルアーツ、人間理解のための基礎学として位置づけているという発言も目立ちました。

奈良女子大学の麻生武氏からは、子ども学の学際性が、「子どもを対象領域とする研究を集めるもの」なのか、「子ども理解の基本原則を研究するもの」なのかで、子ども学の方向性が大きく変わっていくという指摘がありました。

また、チャイルド・スタディではなく、チャイルド・サイエンスであることに魅力を感じているという発言もあり、基礎論と

しての子ども学への期待が高いことがうかがえました。

● 発表者

稲垣由子（甲南女子大学 人間科学部総合子ども学科）
浜田寿美男（奈良女子大学 文学部人間行動学科）
上田信行（同志社女子大学 現代社会学部現代こども学科）
竹内伸宜（神戸海星女子学院大学 文学部心理こども学科）
吉岡眞知子（東大阪大学 こども学部こども学科）

● 司会

一色伸夫（甲南女子大学 人間科学部総合子ども学科）
森津太子（甲南女子大学 人間科学部総合子ども学科）

● 掘り出された＜子ども＞の歴史 — 石器時代から江戸時代まで —

明治大学博物館の特別展を日本子ども学会が後援

日本子ども学会は、明治大学博物館で実施された特別展を後援いたしました。歴史学の分野では子どもを切り口として考古資料が検証されることは少なく、今回の特別展は大変興味深い試みです。

展示資料は、妊娠・出産・子育てを示す土偶や、稲作が始まった時代の水田に残った大人と子どもの足跡、子ども用の棺、玩具のはしりである古代の木とんぼや江戸時代のままごと道具などがあり、誕生・成長・死とさまざまな場面にわたります。

とくに注目されるのは、子どもの手や足を粘土板に押し付けた縄文時代の「手形・足形付土製品」。約10センチから15センチのかわいらしいもので、小さな穴が開けられているものが多く、紐を通して首にかけて用いられていたのではないかと推定されています。出土は北海道・東北地域に限られ、用途については、子どもの安全と健康な成長を願う護符や魔よけだと考えられたり、「立ち祝い」という成長を祝う通過儀礼に用いられたと考えられるなど、さまざまな説があります。世界的にもきわめて珍しく、日本全国で60点が出土していますが、今回はそのうちの50点が揃いました。

今回の特別展は、時期は旧石器時代から江戸時代まで、地域は北海道から九州にまでの範囲に及びます。これだけの幅広い年代・地域と多彩な種類の子どものかわる考古資料が一堂に会するのは、初めての試みです。

期間中には関連事業として、講演会や公開講座なども催されました。



テーマ：「掘り出された＜子ども＞の歴史
— 石器時代から江戸時代まで —」

会 期：2006年10月7日（土）～12月10日（日）

会 場：明治大学博物館特別展示室

住 所：東京都千代田区神田駿河台1-1
アカデミーコモン地下1階

連絡先：TEL.03-3296-4448 FAX.03-3296-4364

HP：www.meiji.ac.jp/museum/

（手形付土製品、足形付土製品 青森県六ヶ所村大石平遺跡出土 青森県埋蔵文化財調査センター）

● ヒトの成長パターンと言語能力の進化

国際コロキウム・公開講演会を日本子ども学会が共催

2006年10月28日、総合研究大学院大学・葉山高等研究センターの研究プロジェクト「ヒトの個体発生の特異性に関する総合的研究」の一環として、東京大学理学部・小柴ホールで国際コロキウム・公開講演会が行われました。

同講演をコーディネートした人類学者の尾本恵市教授は、生物としてのヒトのユニークさに焦点を当てて、そこから進化を考える新しい学際科学「ヒト学」の創設を目指しています。今回の講演会は、言語コミュニケーションという行動上の特異性がヒトの成長パターンの特異性と密接に関連していることを検証する内容となっています。尾本教授は日本子ども学会の会員であり、「ヒト学」と「子ども学」の共通性から私たちの学会も同講演を共催することになりました。

基調講演者は、アメリカ・ミシガン大学Dearborn校人類学科のバリー・ボーギン教授。ヒトの成長研究の第一人者である同教授は、「言語と生活史：ヒトの言語の発達と進化への新たな視点」というテーマで、ヒトの成長パターンの特異性と言語との関係について語りました。

同教授はヒトには幼児期と少年・少女期に2つの特別なステージがあることを指摘します。進化の過程でそのような選択がなされ、ヒトは他の哺乳類のようになめらかに短期間で成体へと成長することがなくなったというのです。では、なぜそのような選択がなされたのかといえば、幼児期のステージは複雑な言語を習得するためであり、少年・少女期のステージは言語のパフォーマンスを高めるためだと推測します。同教授はヒトの成長パターンは究極的には、言語習得との関連で探求していくべきものと考えています。

基調講演に続く第二部では、関連分野からのコメントということで、以下の5名の研究者から発表がありました。

- ・濱田穰（京都大学霊長類研究所・形態進化分野）
「チンパンジーとヒトの成長パターンの比較」
- ・野村泰幸（大阪外国語大学・外国語学部）
「言語が生物学と出会うとき」
- ・安藤寿康（慶應義塾大学・人間関係学系）
「ヒトの心身発達への遺伝的影響：ふたご研究から」

- ・入来篤史（理化学研究所・脳科学総合研究センター）
「道具を使うサルに宿る人間知性の萌芽」
- ・宮尾益知（国立成育医療センター・発達新心理科）
「自閉症にみる社会性欠損 - 心と脳の発達」

これらの研究たちから、「チンパンジーと人間の成長パターンの違いは著しいが、成長期間全体の長さや思春期の存在など類似性も多いこと」「幼児期に生得的な能力により文法が獲得され、適切に言語を組み合わせていくことで効率よく母語が習得されること」「ヒトの社会的コミュニケーションと頭脳の成長との関連が見られること」「サルの脳領域で行われている情報処理は言語機能の進化・発達への橋頭堡となる象徴的思考の始まりの一端を担っていること」など、さまざまな視点が新たに紹介され、言語能力をめぐる心身の発達への考察が深められました。

ヒトの進化のプロセスは他の生物同様に生活スタイルと密接に関係していますが、ヒトの場合とはくに脳＝認知機能が大きく関与しています。その脳がもっとも急激に成長する幼児期の解明はヒト理解に深く関わってきます。ヒト学は子ども期だけを対象とするものではありませんが、子ども学の視野を広げるためのヒントが数多く示されました。このような学際的な講演会には、今後も期待していきたいと思えます。

国際コロキウム・公開講演会

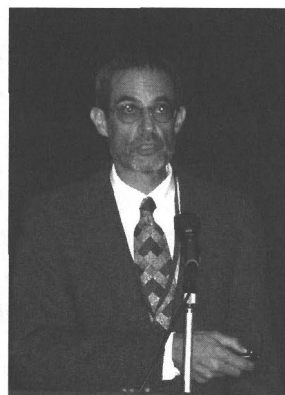
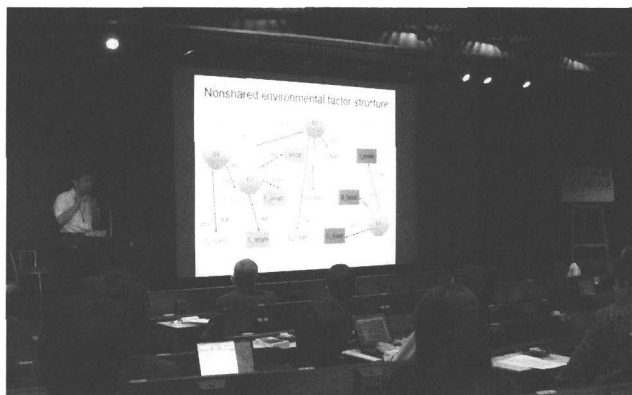
「ヒトの成長パターンと言語能力の進化」

主催：国立大学法人 総合研究大学院大学・葉山高等教育研究センター 研究プロジェクト（人間生命科学）

共催：日本人類学会、日本成長学会、日本子ども学会

日時：2006年10月28日（土）13：00～17：30

場所：東京大学（本郷キャンパス）理学部1号館・小柴ホール



バリー・ボーギン教授

●ちば子ども学会活動報告

ちば子ども学会長／千葉経済大学附属高等学校 入試対策室長 松尾忠正

ちば子ども学会は、平成17年4月に産声を上げました。生後1歳。よちよち歩きを始めたばかりの学会です。昨年の設立総会の折には日本子ども学会代表の小林登先生もご出席してくださり、お祝いの言葉と貴重なご講演をいただきました。2年目の今年は総会に引き続きパネルカッションを行いましたので、以下にご報告いたします。

パネルディスカッション

テーマ：子どもにいろいろな人と関わる機会を与える

コーディネーター：教育関係者

パネラー：母親、小学校教育、青少年活動ボランティア

母子福祉、少年スポーツボランティア

子育て支援

当初は「子どもの現状把握をした上で、彼らに“いろいろな人と関わる機会”をどのように提供しているか、そこにどのような課題があるか」を中心に議論していただく目論見でした。ところが今回、もっと根本的な子どもと関わる「大人たちの問題と課題」を浮き彫りにする形になりました。それはそれで今後の研究・実践に示唆を与える貴重な提言を含むものとなりましたので、以下の通り各レベルの子どもに応じてまとめました。協議の詳細は私どもの学会のホームページを御覧ください。

hw001.gate01.com/chiba-kodomo/chiba-kodomo/

乳幼児期の子どもに関わる大人たちの問題と課題

●問題

- ・育児に自信がなく、“しつけ”が“虐待”になっていないか1人で悩んでいる親が結構いる。
- ・わが子に触れられない親、子ども同士で手をつなぐことすらできなくなっている子もいる。
- ・母親が子どもとの関わり方がわからないと、子どもの言葉の発達が遅れてしまうこともある。
- ・若い母親はコミュニケーションが得意ではない。
- ・コミュニケーションが不得手な母親がおり、健診の間診では「特に困っていない」と答えるが、その実、深い悩みを抱えていたりしている。
- ・子育ては評価されないし、褒めてもらえない。悩みも打ち明けられない。そういうなかで苦しんでいる母親がいる。
- ・携帯電話を片手にベビーカーを押す母親を見かける。会話やおんぶ・抱っこのできない母親が増えそうだ。

●課題

- ・母親同士が悩みを出し合える交流の場をつくってあげることが必要。悩みの共有化で育児不安が解消される。
- ・母同士のよい関係をつくる必要がある。
- ・家庭に閉じこもっている母親たちを2時間くらいは解放してあげられる場をつくり、広げる。
- ・母親であることを楽しまないといけない子育てになる。
- ・親に「大人力」が必要。



- ・母親の話をもっとよく聞いて、外に目を向けさせるようにする。
- ・父親の育児参加が求められるが、くれぐれも母親への共感をもって参加して欲しい。
- ・父親が子どもと関われるよう、企業も変わっていかなくてはいけない。

児童期の子どもに関わる大人たちの問題と課題

●問題

- ・「子どもの居場所」は、大人が子どもに何かをさせる場所になってしまっている。
- ・抱っこの経験が足りず、大きな子どもでも地域指導者に抱っこを求めてくる。
- ・子どもは少数集団のまましていると、阿吽の呼吸で生活でき、コミュニケーション能力や表現力が育ちにくい。
- ・会話の乏しい家庭では、子どもも親に話しても聞いてもらえない、わかってもらえないと思っている。
- ・子どもはゲームで遊ぶが、ゲームは会話を必要とせず、子ども同士の輪ができにくい。
- ・会話・抱っこができない親がいる反面、子どもとの距離感がなく、子どものトラブルを自分自身のことのように思い、子どもと一緒に腹を立てる親が目につく。
- ・若い教師の中には子どもとうまく付き合えない者もいる。

●課題

- ・地域活動で参加する子どもが増えていけば、大人の力も必要となる。特にスポーツでは大人の男性の付き添いが必要。
- ・子どもの居場所づくりは官だけではうまくいかない。地域も巻き込むことが大切。
- ・子どもにとっては、自分の思いと外れることがいい経験になる。そういう意味で様々な大人と出会うようにすることが大事。

・一から十まで自分でやる体験は創造力を生む。そういう場作りを心がけるべき。

- ・偶発的な出会いをつくるようにしたい。
- ・親や指導者が「子どもの目線」ではなく、「子どものための目線」をもつことが必要。
- ・子ども時代にはしっかり子どもをさせる。子どもとの関わりは、学校の先生はオープンエンド、親や地域の大人はクローズドエンドでいい。
- ・上級生に下級生の兄貴分となってもらい、上級生の自覚を育てることも一つの工夫。
- ・大人は子どもたちの安全安心を確保し、子どもたちが主体的に自由に活動できるよう見守る。
- ・自分の子どもへの接し方を考えるチャンスは、親が地域行事に参加すること。
- ・「チャレンジ通学合宿」など、子ども同士を繋げる場づくりの試み。多くの大人が参加し、子どもの安全を確保する中で、関わりを広げる試みの輪を広げていくといい。
- ・子どもたちに自分を振り返らせるためには、たくさんの人との関わりが重要。
- ・学校も悩みを大いに発信し、社会全体で考えていく、そういう仕組みが必要。

10代の子どもの関わる大人たちの問題と課題

●問題

- ・夜間外出している子どもたちも何かを伝えがっているが、年齢が上がるにつれ子どもたちの居場所が少なくなっている。

・相手をあまり否定しない話し方が気になる。相手を尊重するのではなく、言葉でも、気持ちでも、相手に触れようとしない。

- ・何かを企画するとき、議論して決めるのではなく、できもしないような量でも、出た意見をみんな取り入れようとし、相手の意見を否定しない。想像力が働かない。
- ・今の子どもたちは人との関わりが薄い気がする。初めから「分かってもらえない」と思っているようだし、生きていく自信がないようにも感じる。何となくたむろし、そういうところに切り込んでいく大人もほとんどいない。

●課題

- ・学校の外にもおもしろいことがたくさんあることを知らせていきたい。
- ・中高生の参画で地域行事が格段に活性化した事例も参考にしたい。

*

今年定期的に小学習会を開催することになり、11月25日には「ゲームとのつきあい方を考える」というテーマで講演会を行いました。ソニーコンピュータエンタテインメントの福永憲一氏を招いて製作者の側からのご意見をうかがいながら、TVゲームと子どもについて考えました。

チャイルド・サイエンス原稿募集

日本子ども学会では「チャイルド・サイエンスVol.4」に掲載する原稿を募集します。

●条件

- ・チャイルド・サイエンスの確立に寄与するもの。
- ・子どもの成育環境の健全化に寄与するもの。

●内容

総合的研究、探索的研究、総説、報告、主張、資料、書評など。学際的な学会という性格上、特定分野の高度な専門知識を有する者でなくとも問題意識を共有できるものが望ましい。

●投稿資格

著者または共著者が本学会の会員であること。

●採否

編集委員会で検討した上で決定します。

■締切り：2007年4月末日

■原稿量：4000字程度または8000字程度の和文（図表含む）

■送り先：〒186-0004 国立市中2-17-4-105

日本子ども学会編集部

TEL. / FAX.042-573-9512

kinoedit@ybb.ne.jp

※投稿は原則として電子メールでお願いします。



チャイルド・リサーチ・ネット (CRN) は 「子ども学/Child Science」研究所です



インターネットを活用し専門家による豊富な研究レポートや調査データをもとに、子どもについて「調べる」「探す」「議論する」場を提供しています。

◀ URL <http://www.crn.or.jp> ▶



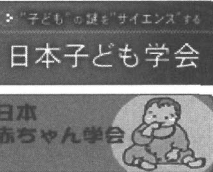
こんなときには、
CRNへ
アクセスして
ください。

- ★子どもに関する調査資料や読み物を入手したいとき
- ★子どもの問題に取り組んでいる研究機関や団体を調べたいとき
- ★全国の保育園、幼稚園、学校がどんなホームページを持っているのか、見たいとき
- ★子どもをめぐるいろいろな問題で、他の人の意見や考え方を知りたいとき
- ★子どもに関するさまざまな研究情報を得たいとき



CRNには、日本子ども学会、日本赤ちゃん学会の公式ホームページ
子育て・保育・教育 お勧めブログページもありますよ！

●CRN発刊物●
送料負担で進呈中



チャイルド・リサーチ・ネット (CRN)
〒101-8685 千代田区神田神保町1-105
神保町三井ビルディング15F
(株)ベネッセ次世代育成研究所内
電話：03-3295-0293 FAX：03-3518-2553



株式会社ベネッセコーポレーション

教育、それは 一人ひとりの 「よく生きる」のために。

多くの可能性を秘めた子どもたち一人ひとりが、よりよい未来を生きるために。ベネッセは、0歳児～大学受験生まで一人ひとりのステージに合う「学び」を実現する商品・サービスを開発、お届けします。一貫してめざすのは、知識や技術の学習を通じて自分から学ぶ力、学んだことを実生活で役立てる力、目標に向かって挑戦し続ける力を伸ばす教育。一人ひとりのゴールへと成長していく子どもたちと一緒に、ベネッセも進化を続けます。

Benesseは、ラテン語の「bene(よく)」と「esse(生きる・暮らす)」を一語にした造語です。

Benesse® 教育情報サイト
<http://benesse.jp/>

Benesse®

人は成長する。だから、ベネッセも進化し続けます。

こどもちゃれんじ	進研ゼミ 小学講座	進研ゼミ 中学講座	進研ゼミ 高校講座		
	みらい	進研模試 私立 進研模試 東大特講 京大特講	進研模試		
	Scholar English BE-GO	Benesse こども英会話	GTEC Global Test of English Communication	Berlitz	
	東京大学大学院 情報学環 ベネッセ先端教育 技術学講座	東京大学教養学部 教育教育社会連携 (ベネッセコーポレーション) 講座 Liberal Arts Development for College and School (Benesse Corporation)	東京大学大学院 教育学研究科教育測定・ カリキュラム開発 (ベネッセコーポレーション) 講座 Educational Assessment and Curriculum Development (Benesse Corporation)		
	Benesse® 教育研究開発センター Benesse® 次世代育成研究所 Benesse® 食育研究所	チャイルド リサーチ・ネット			